2023.8.6
中日新聞

（第3種郵便物認可）

生成ＡＩ 利点や危険性議論

大阪 ＤＳ系学部持つ滋賀大などシンポ

生成ＡＩについて語り合う滋賀大の南條教授（右から2人目）ら＝大阪市の大阪成蹊大駅前キャンパスで

データサイエンス（ＤＳ）系の学部を持つ滋賀大（彦根市）、兵庫県立大（神戸市）、大阪成蹊大（大阪市）の三大学によるシンポジウムが二日、大阪成蹊大で開かれた。学習したデータを基に画像や文章、プログラミングコードなどを自動作成する技術「生成人工知能（ＡＩ）」に関し、扱う上での重要な視点などについて教授らが意見を交わした。

滋賀大データサイエンス学部の南條浩輝教授は、ＡＩの登場による将来的な人間の学習や創作の必要性について、すでにＡＩが台頭している将棋や囲碁を例にＡＩを解析したり、練習相手にしたりすることで「新たな手法をＡＩから学ぶことができる」と語った。

兵庫県立大社会情報科学部の山本岳洋准教授は、自身の講義を受講する学生約百人に、質問を入力すると文章で回答する「ＣｈａｔＧＰＴ」の利用アンケートをした。使ったことがある学生は四月に約四割だったのに対し、七月には九割になり、多くの学生に生成ＡＩが浸透してきたと紹介。

一方、情報検索の手段としては、真実のように見える嘘「ハルシネーション」の危険性があるとして、本当に正しいのか考える「利用者側の批判的思考が必要だ」と強調した。

映像監督としても活躍する大阪成蹊大芸術学部の糸曽賢志学部長は、ＡＩの進化によって人間に求められる点について「着眼点と感情が大事」と説明。ＡＩをどう活用させるか考えることから新しいものを生み出したり、人を助けたい、驚かせたいといった感情から発明に結びついたりすると語った。著作権に配慮はしながら、アイデアを増やす手段としても有効だと話した。

シンポジウムは近年、新設が相次ぐＤＳ系の学部についての情報交換などを目的に開かれた。

（形田怜央菜）